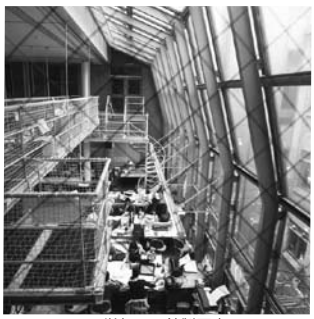
UIFA JAPON NEWSLETTER

No.75 May. 25, 2008

■主な内容

・ＵＩＦＡ ＪＡＰＯＮ　第16回通常総会と記念行事のお知らせ
・特集　アイディンティティー　アジアの建築・まち・住まい
　・ハフェマウル(河回村)をたずねて
　・香港はアツい
　・中国の魅力的な空間
・新シリーズ募集します「魅力的なリノベーションここにあり」
・６月総会の会場は建築の宝の山―東京大学本郷地区散策のおすすめ
・会員おすすめ本「場所に聞く　世界の中の記憶」
・役員会報告

工学部２号館では古い建築の上に新しい建築が載っている


工学部１号館製図室

第16 回UIFA JAPON 通常総会と記念講演会

2008年度第16回UIFA JAPON通常総会と記念講演会が、6月21日(土)に開催されます。総会では、事業や会計について報告があり、今年度の計画について語られます。また、今年度は２年毎にある役員改選の年にあたっています。

記念講演は、鈴木博之先生です。また終了後キャンパス内建築探訪、交流会も企画してあります。普段活動になかなか参加できない方も是非参加ください。

会場は、東京大学本郷地区キャンパス工学部１号館での開催となりました。元々、加賀藩の上屋敷だった本郷キャンパスは、本郷通りに面した赤門が有名です。その北側に位置する正門から入ると、安田講堂に向かって整然と並ぶ銀杏のプロムナードがあります。総会と記念講演会の会場となる工学部１号館は、正門を入って左側、工学部列品館の奥(北側)に、中庭を挟んで建っています。４ページにも構内の紹介記事を載せていますのでご参照ください。

ご講演くださる鈴木博之先生は、建物のデザインや形、歴史や文化、精神性について、重視し歴史ある建物を保存し活用する、ガイドラインの制定にも携わっておられます。街や土地が持つ様々な要素からくる個性にも着目し、建築を広い視点でとらえ数多くの著書を出しておられます。東京大学の歴史ある校舎で、「保存と創造　アンコール遺跡群から現代都市まで」というテーマで講演いただくことは、大変意味深いことと考えます。

是非、参加ください。(須永淑子)(写真:井出幸子・古村伸子)

◇◆◇ 通常総会と記念講演会 日程・プログラム ◇◆◇

工学部１号館内田ゴジックの
エントランスポーチ

■ **日時：６月２１日（土）　13：00開催**

■ **会場：東京大学本郷キャンパス　工学部１号館　15号教室**

■ タイムスケジュール

13：00～13：40　通常総会
14：00～15：30　記念講演会

「保存と創造－アンコール遺跡群から現代都市まで－」
講　師：鈴木博之（すずき　ひろゆき）先生
東京大学大学院工学系研究科教授

15：40～16：50　キャンパス内建築見学
在学生の案内による建築を中心とした見学

17：00～18：30　懇親会
会　場：学士会分館（キャンパス内）８号室
鈴木先生を交えての懇親会

東大本郷キャンパス構内地図

ハフェマウル（河回村）を訪ねて

平井　美蔓

韓国、ソウルの南東約200キロ程、慶尚北道･安東（アンドン）市郊外にハフェマウルという村がある。この村は16世紀「李朝時代」以来の古い村の形態と慣習がそのまま残っていることで知られている。村全体が伝統的民家の宝庫であり、生きた民家園の趣を持っている。数多くの民家が移築されている他の民族村は、村そのものは造りものなのでどこかオープンセット的な感じを免れないのだが、ハフェマウルは村の成り立ちや、土地や歴史に根ざしたなりわい等を読みとらせてくれて、今に生きている。

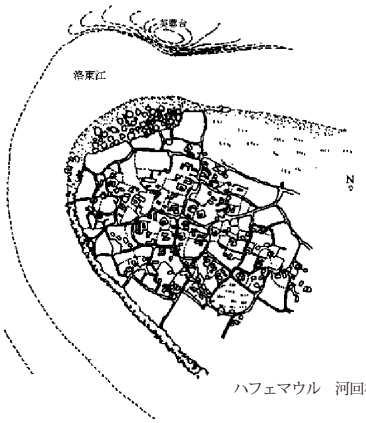
■　道のパターンは亀甲文様

村は洛東江という河にU字型に囲まれ、半島のような馬蹄形にすっぽりとおさまっている。蛇行する河のおかげで三方からの闖入者が入り込む気遣いはなく、安寧な気分で暮らせそうである。土地は村の中央部がわずかに高くなっており周囲は平坦だ。ハフェマウルという地名を漢字では「河回村」と書くが「河が周囲を回っている村」というわけで地名がそのまま村の姿と成り立ちを表している。ゆるやかな丘になったU字型という地形から自然発生的に生まれてきたからだろうが、村の道のパターンは亀甲文様のようになっていて十字に直交する道が殆どない。村のなかをいつまでも歩き回っていられるのは、道に変化があり魅力があるからなのだ。どの道もまっすぐに見通すことはできず、折れ曲がりゆるやかにカーブし、思い思いの方角からきた別の道と鈍角や鋭角に交わったりして、広い道も小径もそれぞれ個性豊かな表情を持っている。村の対岸にある断崖・芙蓉台の上から村全体を俯瞰すると、瓦屋根や藁屋根を載せた家々が密集せず、かといって散漫にもならず程よい密度で肩寄せ合うように集まっている。ふっくらと柔らかそうな藁屋根は羊など草食動物の背中を連想させ、その群れが川に水を飲みにきているようにも見える。「河に優しく抱かれて守られている美しい村」という言葉がそのまま目の前にあるので、ただ呆然と眺め渡すばかりであった。

■　建築的知恵と居心地のよいスケール感

建てられてから90年程になる伝統的な韓国の住宅がハフェマウルでの宿であった。母屋と中庭をはさんで平行に建てられた棟に民宿の客室としてのオンドル部屋がある。これらの部屋には縁側（トウェンマル）や広縁（大庁マル）が付設されていて、夏用のマルと冬用のオンドル部屋というはっきりと性格の異なる２種類の居心地を備えている。オンドル部屋はもともと竈を焚くときに出る煙を床下に引き込んで床暖房としたものだから暖房効果の点からこじんまりとした部屋になる。せいぜい４～５畳程度の広さで天井高は７尺程度。オンドル部屋特有の包みこまれるような落ち着きと居心地の良さは、この絶妙なサイズによるところが大きい。どこか茶室を彷彿とさせる。そして開口部が小さいので壁に囲まれている印象が強く、密室感が醸し出される。開口部建具の障子紙は枠からはみださせて張り隙間風を防いだり、出入口の敷居を８寸程たちあげて冷気が床をなめて侵入することを防いだりと防寒への建築的な知恵が、伝統的な住まいに独特の雰囲気をあたえている。

1992・2006年の村への旅で、韓国の田舎の魅力とおおらかさを知り得たのであった。



ハフェマウル　河回村

中国の魅力的な空間

楊　英美

私は在日中国人３世で、中国を度々訪ねています。歴史文化と現代文明が混濁して生まれるアンバランスさと、エネルギー。それが中国の魅力的な空間を作り出しているのではないかと考えています。

■　三輪自転車が作り出す空間

自転車が好きなので、ふと目が行ってしまうのですが、中国の都市部で見られる自転車の中でも、三輪車は特に面白いです。三輪車は素晴らしい仕事の道具で、車と違って雑然とした街中を動きまわることができます。商売人たちは道端に仮設の店舗を自転車でこしらえ、独特の空間を創り出します。朝多いのが屋台料理屋で、荷台を拡張した下ごしらえの場・調理場・客席をそなえた自転車が数台集まり、路上に突如食堂が生まれます。夜には街角に串焼屋などの屋台が出て、路上酒場となるのです。

三輪自転車の屋台、三輪自転車の自転車修理屋

市場や門前町でよく見る物売りの自転車は、菓子類を陳列するショーケースを乗せたり、色とりどりの工芸品を台に並べたり、多種多様に工夫が凝らされ、路地裏がまるでバザールのような空間へと変貌します。

極めつけは自転車の修理屋さんが、やはり三輪自転車だったので、これは浸透した文化なのだと思いました。誰が作ったのかは知りませんが、三輪車はとても頑丈にできていて、後輪のブレーキは大きなレバーでかけるようになっています。「中国は広い」というのは知られていますが、道幅が広いため、仮設の店舗が自由に設置されるのでしょうか。このようなエネルギッシュでクリエイティブな中国の文化が、国際化という名の下に失われてしまっては寂しい気がします。

■　前近代的な建築と現代的な暮らし

北を内蒙古と接する山西省で、民居（中国の民家）の調査をしたり、祖父の生まれた村を何度か訪ねたことがあります。山西省は中国の中ではもっとも経済的に貧しい地域です。冬は乾燥して寒く、夏は雨が少なく暑いという厳しい気候で、黄土高原の大地には粟や稗、麦、蕎麦が植えられています。米が採れない山西では、主食は麺類で、その種類は数百とも言われています。かつてマルコ・ポーロがここを通り、イタリアにパスタを持ち帰ったとのこと。屋上に収穫したトウモロコシをびっしり並べ、乾燥させている光景もよく見られます。

省都を離れると、近代化されていないところが多く、ひとつひとつの小さな村が生きた博物館のように感じられます。建物は土で作ったレンガを積み、室内ではオンドル式のベッドを使用し、燃料は練炭です。一見すると原始的な「ヤオトン」という、山の側面に横穴式のトンネルを掘って作った民居もあります。厚い土の壁に囲まれているので、快適な温湿度が

香港はアツい

中島　明子

初めて香港に行ったのは 1994年。1997年に香港が150年にわたる英国植民地支配から中国に返還される少し前であった。折角行くのだからと英国の CIH（公認住居管理協会。オクタビア・ヒルの弟子が創始）を通して、香港支部で香港住宅庁の CHAU 氏を紹介してもらい、彼に案内して頂いた。その時、英国カーディフ市の住宅局長ご夫妻と同行した。

■　香港がうまくいっているのは実に謎

英国では高層公営住宅問題が深刻なのに、「香港がうまくいっているのは実に謎」なのだ。以来CHAU氏との交流が続き、香港が発する謎と魔力に取込まれてしまった。

高層公営住宅群

香港は超高層住宅が林立する類稀な地域であり、中心街の人口密度は何と 25,000 人 / ㎢。住宅の半数は香港住宅庁が供給管理する公共住宅で、他は分譲マンションと民間賃貸住宅である。九龍城砦の高層スラムが取壊される前に誘われたが見学できなかったのは今でも残念に思っているのだが、謎の解明は少し進んだ。

■　謎の解明

高層居住における子どもの発達の問題は、市街地を高層高密化することで郊外の自然を確保し、そこで週末を過ごす。日常的には団地の遊び場を活用し、狭くてもできる遊びの開発と、英国の経験によるプレイグループが支援する。

香港では、第二次大戦前までは中低層のスラムで溢れていたが、戦後、革命後の中国本土から流入する人口をカバーするためには、高層住宅の供給しか選択肢はなかった。しかし、英国のインフラ整備技術と大胆な公共住宅政策により、乱開発を防ぎ、世界に稀なる秩序だった稠密都市の実現を可能にしたのである。もっとも香港の土地は、英国の植民地時代には女王様のもの、返還後には中国政府のものであることも、実現できた要因である。ほんの一部には中国の伝統的街並みを残しているところがある。住民の開発反対で残った所と、博物館として残している地域である。新旧のコントラストは余りに激しい。

香港の公共住宅団地の中庭（撮影　坂田実花）

■　環太平洋諸国と連携して事業展開

さて中国返還後、自由と市場経済を謳歌していた香港の友人たちはさぞかし意気消沈しているかと思いきや全くの杞憂だった。CIH 香港支部は 2001年にアジア・太平洋支部となり、膨大な中国本土の集合住宅管理、建物管理の技術指導、助言、資格付与や訓練の提供を行うという。中国本土の巨大市場をターゲットに、オーストラリア等の環太平洋諸国と連携しながら鼻息荒く事業を展開している。

それにしても、夏に行って風邪をひく位冷房漬けの香港もようやく持続可能なエネルギー問題を考え始め、しのび寄る高齢化問題にも手をつけ始めた。しかし、民間賃貸住宅の老朽化問題はどうするのだろう…といった心配をものとのせず、グローバリゼーション時代に英語を操り、巨大市場を握る香港の行く末はアツい。

高層住宅近景

城壁の中の村

保たれる高性能な住居です。ヤオトンに暮らす新婚夫婦のお宅を拝見したのですが、真新しいきれいなソファとベッドが置いてあり、変な感じがしました。

■　歴史的遺構の中の村

また山西省では、万里の長城によって、かつてはモンゴルと中国を隔てていた、その境界線にある村を訪れました。その村は、崩れかけた城壁の中にあるのですが、住居も、学校も、畑もきちんとあり、現在でもれっきとした村です。無邪気な子ども達が、物珍しさに私たちに近寄って来ました。かつては、村のそばに関所があり、敵の侵攻を防ぐために兵士が駐在していました。村は、その兵士たちに食料を供給する役割を担っていたので、城壁で取り囲み、厚く守られていたのです。

長い長い年月を経て風化した門の、その道の敷石には、馬車の轍によってできた深い溝が刻まれていました。

門を通る子どもたち

新シリーズ募集します

『魅力的なリノベーションここにあり』

世はストック時代。リノベーションという言葉も流行の域を越え定着した感があります。一方で既存建築物を改修するには法規制の壁やコストの問題がのしかかるのも事実です。しかし古いものを大切に使うのは元々、日本の良い文化ですし、環境負荷も小さく出来ます。最近は、普通の建物を魅力的に改修した事例を見掛けることも増えました。そこでニュースレターでは“魅力的なリノベーション建築”“古くても丁寧にメンテナンスされ使いこなされた建物”などシリーズで紹介していきたいと思います。

所在地、最初の竣工期日、改修の竣工期日、当初の使用目的と改修後の使用目的、魅力のポイント、改造、増築、改修のポイント、設計組織も紹介されればベストです。

スケッチまたは写真もぜひおねがいします

次号から皆様からの推薦や紹介原稿を募集します。

どうぞお楽しみに！よろしく♪

（編集委員会）

No.75 May. 25, 2008

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局
〒 102-0083
東京都千代田区麹町２－５－４
第2押田ビル ㈱生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@LIQL.CO.JP
発行 2008 年 5 月 25 日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUARITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083
PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

６月総会の会場は建築の宝の山

―東京大学本郷地区散策のおすすめ―

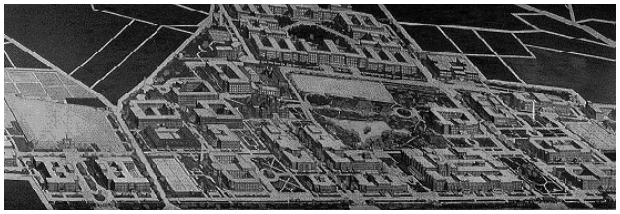
梅雨の晴れ間の陽光に緑が美しく映える６月、UIFA JAPON 総会への出席をチャンスに、建築の宝の山を楽しんではいかがでしょうか。豊な緑に囲まれた東京大学本郷地区は、歴史的建造物あり、竣工したばかりの話題の現代建築あり、すばらしい文化資産がみなさんを待っています。編集委員会ではみなさんよりひとあし先に散策を楽しんできました。そのごく一部をここでご紹介しましょう。

工学部１号館の増築部分の廊下ではもとの外壁が間近に見える

■ 歴史的な文化財が当時の姿のままに

東大のシンボルとも言われる赤門（旧加賀屋敷御守御門）は、文政 10 年（1827 年）に完成した重要文化財です。徳川将軍十一代家斉の第 21 女溶姫が加賀藩に輿入れした際に建てられたもので、いかにも加賀百万石を象徴する豪華な構造です。また、建築として本郷キャンパスで最も長い歴史を持っている化学東館（山口孝吉 1916年）は、今なお当時の気品ある面影を残しています。

正門近くにある法学部や工学部などの建築群は、内田祥三の計画により関東大震災後の 1930年代に建設されたものです。「内田ゴシック」と呼ばれるデザインがこのエリアを特徴づけています。



内田祥三による東京大学構内の震災復旧計画（出典：東京大学図書館 Web）

歴史的建造物の保存とリノベーションの例も随所に見られます。総会と記念講演に利用させていただく工学部１号館（内田祥三 1935年　香山壽夫 1996年リノベーション）の増築部分の廊下では、もとは外壁だった「内田ゴシック」のデザインを間近に見ることができ、また、旧中庭に造られた製図室（１ページ写真参照）は明るい自然光のもとでいかにも心地良い空間に見えました。計画当時は建物のリノベーション自体の意義を説得する必要があったそうです。一方、工学部２号館（内田祥三 1938年　岸田省吾 2000年改修）では歴史的建造物の上に新しい建築を“載せる”形が取り入れられていて、ダイナミックな構造が目をひきます。

■ すばらしい現代・近代建築の作品群

現代建築は、弥生講堂一条ホール（香山壽夫 2000年）、法学部教育棟（槇文彦 2004年）、福武ホール（安藤忠雄 2008年）など、いずれも興味つきない建築です。

本郷地区では、ここに取り上げた建築以外にもさまざまな年代に建設されたすばらしい建築に出会うことができます。本郷地区で設計を手がけた高名な建築家をあげただけでも伊東忠太、岸田日出刀、吉武泰水、丹下健三、芦原義信、前川國男、大谷幸夫、槇文彦、岡田新一など。総会に向けては、散策が何倍も楽しくなる工夫が検討されているとのことです。ぜひ総会にお出かけください。（古村伸子）

福武ホールから総合図書館を覗く

会員おすすめ本

「場所に聞く、世界の中の記憶」

鈴木博之著、王国社

ある一つの地点に潜むそれぞれの磁力のようなものに、聞き耳を立てて著者が立たずむ。そんな情景を思い浮かべる。欧州が13カ所、北米が４カ所、東洋が７カ所について、博識に富んだ時代背景や現場観察を言葉へと昇華させたエッセイが連なり、著者撮影の写真や図版とともに鈴木博之の世界が展開する。「場所の霊」ゲニオ・フィウス・ロキについての最初の項を読むと、ゲーテの元祖カリスマ的側面を知ることができる。「廃墟の声」では、カンボジアの遺跡と自然と時間のバランスを願うささやきに耳を傾ける。シカゴ・トリビューン（新聞社）の建物が摩天楼ブームの走りであったとは。仁川（インチョン：韓国）が日本の現代史の側溝としてのシーンを残している。等々その場への興味は尽きない。原体験に「股眼鏡」から見た逆さ世界を持つ著者は、建築的思考と都市の文化に及ぶ深い見識を根底に、私達を親しみのあるその場へ心地よくいざなってくれる。（中野晶子）

■ 役員会報告

第11回２月28日：災害復興見守りチームによる法末の景観に関する報告書の助成機関への納品報告。古村伸子会員の広報委員への就任を了承。ニュースレター 75号企画案提出。第43回海外交流の会の総括。スケッチや写真が好評で、絵はがき等のグッズ販売を検討することとする。総会準備について、東大構内の建築見学についても検討。第44回海外交流の会講師の検討。ルーマニア大会報告書企画案提出。広報委員会とは別に記録作成委員会を作り検討することとする。2008年度予算案の検討。

第12回３月27日：ルーマニア大会記録作成委員会メンバー決定。第43 回海外交流の会収支報告。第44 回海外交流の会日程及び講師の決定。2008年度予算案の提案。総会準備の進捗状況報告。役員交代、規則細則改正の提案。災害復興見守りチーム「あぜ道茶会」日程及び会場決定の報告。

第1回4月28日：災害復興見守りチーム活動報告。総会基調講演準備に関する報告。第44回海外交流の会テーマ検討。中野晶子会員より提出の「研究会『ASFA 組』の設立及び事業企画書（案）」について検討。次期役員改選について検討。栗山礼子会員からの手紙の紹介。

■ 編集後記

５月は木々の観察に適した季節。それぞれの木々が芽出しや花で個性を主張します（須永）「学校のトイレをUIFA にしよう」横浜市の小中学校に焦点を当て、アートの力でトイレの居心地を考えていく研究会「ASFA 組」を始めます（中野）清々しい季節に初の編集参加で懐かしいウィメンズプラザに来ました。利用者がとても多いことに感動（古村）ニュースレター65号で取り上げた「求道会館・求道学舎の保存と再生事業」が2008年日本建築学会賞の業績賞を受賞。おめでとう！（石川）次世代に、都市の記憶を継承するための技術が東大キャンパスにあり。必見です（井出）季刊のニュースレター75号目、月刊誌はみごとなリレー編集で発行継続、総会は16回目、UIFA JAPONのさらなる進展をねがいつつ再見（渡邉）